風土記の丘の花だより339

今、そしてこれから見られる植物（2026年9月19日）

あれだけ日照りが続いたのに、今度は秋雨前線や台風のせいで、ぐずついた天気が続きます。でも、野山の植物は元気をとりもどしたようで、秋の花が次々と咲き始めました。ヒガンバナも花茎を長く延ばし、そろそろ真っ赤な花を咲かせてくれることでしょう。



小さな花ですが、とてもかわいいシソ科の花、イヌコウジュです。イヌは植物の名前によく使われる言葉で、「役に立たない」という意味があります。コウジュは漢方の薬草ですから、イヌコウジュは「効き目のないコウジュ」ということになりますね。よく似た花にヒメジソがあり、植物を勉強し始めたころは、区別がとても難しかったのを覚えています。もし興味があったら、図鑑やスマホでその違いを確かめてみてはいかがでしょうか？ヒメジソもたくさん生えています。



ガガイモの花が満開です。名前には激しい響きがありますね。でも花は小さくとても可憐です。その割に実はとても大きくなります。写真はまだ若い実ですから小さいですが、秋の終わりにはレモンほどになって、それが割れると、中からたくさんの綿毛が飛び出します。ガガイモはつる草ですから、他の木やフェンスなどに巻き付いて成長します。厄介に思える人にとっては迷惑でしょうが、ちょっとゆとりを持って、魅力的な花や実を愛でるのも、たまにはいいのではないでしょうか。



キダチコマツナギのピンクの花が咲いています。日本にはもともとマメ科のコマツナギという植物があります。それは根が強く張るので、馬を繋いでも大丈夫という意味で名付けられました。かつてその仲間のキダチコマツナギをチ中国から日本に持ち込んで、造成地や高速道路の法面（のりめん）に土留めとして植えたのです。それが広がって、あちこちで見られるようになってきました。これは墳丘に生えていたのでてっきりその目的で植えたのかと思いましたが、学芸員に尋ねるとそうではないことが分かりました。



秋の風情たっぷりのワレモコウが風に揺れていました。数年前に比べるととても少なくなりましたが、まだ残ってくれていて嬉しかったです。前山Ａ地区です。「大きなマッチ棒の先みたい・・・」といっても、今、マッチ棒もほとんど見なくなって、それがイメージできない人が増えてきましたね。赤黒く丸い花で、独特な姿です。でもこれでもバラ科なのです。さて、次回の花だより３４０号は一回お休みをいただいて、２週間後の１０月３日（土）に発行させていただきますので、ご了承ください。では、連休を有意義にお過ごしください。

松下